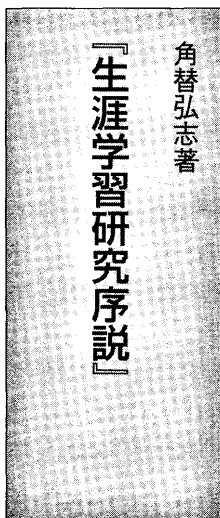


●図書紹介●



角替弘志著

『生涯学習研究序説』

本書は、著者が静岡大学を停年でご退職になるにあたって、それまでに執筆された論文のうち、生涯学習に関するものを中心に集大成されたものである。序説となっているが、生涯学習の基本的理念やその実際的な展開について充実した考察が行われている。

内容としては、著者のこれまでの関心であったイギリスの状況と大学内および静岡県の生涯教育にかかわる委員などの立場からとらえた静岡県の状況が多くなっている。イギリスは、生涯教育が提唱される以前から伝統的に大学のエクステンションや継続教育など、実質的に生涯教育・生涯学習が発達している社会であり、その実情の詳しい考察は、これからのわが国における生涯学習の推進に多くの貴重な示唆を与えてくれる。また、静岡県は生涯学習推進において、掛川市など全国的に注目されている地域のある県で、その実情についての分析・考察は、日本全体の生涯学習のこれからの発展を考えるうえで重要な方向を示してくれる。

しかし、日本学校教育学会としてとくに注目したのは、学校についての基本的・原理的な論が詳しく展開されていることである。全体構成は、第1部「生涯学習の課題と展望」、第2部「生涯学習施策の展開」、第3部「イギリス継続教育の研究」となっているが、第1部第3章において、「生涯学習社会における学校」について、「学校の基本的性格」「社会的諸勢力と学校」「両親と学校」という三つの視点から論じられている。

生涯教育は、ユネスコが主催した成人教育推進国際会議でラングランによって提唱されて世界各国が注目するようになったものであることは、つとに人口に膾炙しているといつてよいであろうが、ラング

ラン自身は学校教育の重要性を強調していたにもかかわらず、成人教育を推進する会議で提唱されたことから、また、わが国では、『社会教育の新しい方向—ユネスコの国際会議を中心として—』（日本ユネスコ国内委員会）として紹介されたことなどから、学校教育は生涯学習論議のなかで蚊帳の外におかれてきたきらいがないわけではない。また、生涯学習社会においては、学校の重要性は相対的に低くなると考えるむきもないわけではない。

しかし、ラングランの言を引き合いに出すまでもなく、自主的・主体的な学習を基本とする生涯学習を普遍化するためには、やはり学校教育、とくに義務教育が土台としてしっかりしていなくてはならない。その意味において、著者が、学校の基本的な性格について、原理的、法的、政治的などの諸点から詳しく論じ、さらにイギリスにおける親の学校選択権や親の学校管理権について考察しているのは、まさに現下のわが国の学校教育改革を推進するにあたって、時宜を得たものといいたい。

（上越教育大学 新井郁男）

●東京書籍，A 5 判，335頁，3,800円（本体）